

自閉症スペクトラムの高校生と父親の親子関係構築のための支援

竹中 正彦

（兵庫県立姫路特別支援学校）

【問題と目的】

コミュニケーションのよくとれている父親は、育児関与や子どもとの接触の頻度は高く、子どもが問題行動を起こしたときは積極的に対処しており、叱るときは「話して諭す」という子どもにとって受容的な優しいタイプである(武田, 1993)。本研究の自閉症スペクトラムの高校生は中学校時代、不登校傾向を呈しており、父親との良好な親子関係が築けていなかった。この高校生と父親が円滑なコミュニケーションを取り、望ましい親子関係が築けるような支援のあり方について検討する。

【方法】

1. 対象生徒の生育歴とアセスメント

支援開始時、特別支援学校高等部1年の男子。小学校で知的障害を伴う自閉症と診断を受けた。田中ビネー知能検査（6年生時 IQ70）。中学校は支援学級に在籍したが、登校しながら、母親や祖母の強い働きかけで登校しても、1時間ほど教室内で寝転がり、特に活動することもなく、給食を食べないまま帰宅することが多かった。中学2年の時、母親が病気で他界してからは父親と二人暮らしで、さらに不安定になった。中学校3年間で登校できたのは半分くらいであったが、特別支援学校高等部に入学した当初も同様であった。A君の養育に関わっていたのは主に母親であったが、母親が亡くなってからは、母方の祖母の力を借りながら、父親が一人でA君を養育することになった。A君は、父親に注意されるとパニックになり、家を飛び出すこともあった。食事は父親が済んでから一人で食べていて、家では、ほとんどの時間テレビを見て過ごしていた。S-M 社会生活能力検査（高1-5月；6歳3ヶ月）。WISC-III（高1-9月；全IQ44、言語性IQ60、動作性IQ<40）。

2. 支援開始までの状況と支援内容（支援期間：高1-5月～高2-10月）

- (1) A君は、夜勤もある不規則な父親の仕事のスケジュールを知りたくて、父親に尋ねても答えてもらえないとその度にパニックになって大声を出したり自室にこもったりしていたので、わかる範囲で予定をカレンダーに記入してもらうように父親に依頼する。
- (2) 朝父親がA君を起こして登校させようとしても起きようとしなかったA君に対して、自分で起床し、公共のバスを利用して自力通学できるように、スモールステップで段階的に支援する。
- (3) A君の学校の様子を随時父親に伝え、実習や進路先等について具体的に情報提供していく。

【結果】

A君は父親のスケジュールがある程度把握できるようになり、父親が夜勤で食事を一人で摂るのかの見通しが立ち、時には父親不在で羽を伸ばしたりして、安定した日々が送られるようになった。また、A君は朝自分で起きてバスに乗り、自力通学することが可能となったので、父親にとって、朝A君を起こして学校に間に合うように家を出発させるストレスがなくなった。進路に関しては、今まで授業参観をしたことがなかった父親がA君の校内作業の様子を参観しに來たり、仕事を休んで、現場実習先に何度も足を運んだりした。A君は学校の帰りに父親の好きな缶コーヒーを買って帰り、父親に渡すといったエピソードも聞かれた。父親との会話も増えたようである。

【考察】

支援開始以前、父親は不登校傾向が強く無気力なA君に対して「感情的に怒鳴る」ことが多く、コミュニケーションが上手くとれず（武田, 1993）、A君の将来を見通せない様子であった。しかし、A君の社会生活能力が向上し、自立度が増すにつれて、具体的にA君の将来像が見えてきたこともあり、家庭での会話も増えていった。五十嵐・萩原(2003)は、不登校傾向を低減させるには、概して幼少期に父に不信感を抱かず、安心できる愛着関係を築いていることが重要であると指摘しているが、愛着形成の時期が少々遅れても、父子の良好な関係が築かれる可能性があることが示唆された。

【引用文献】

- 五十嵐哲也・萩原久子. (2003). 中学生における不登校傾向に関する研究— (3) 父子関係との関連—, 日本教育心理学会総会発表論文集 (45), 739.
- 武田京子. (1993). 現代社会における父親と子ども—コミュニケーションからみた父子関係—, 岩手大学教育学部研究年報 第53巻第1号, 21～29.